

# 学術情報センター ニュース

## 電子計算機システムの更新にあたって

学術情報センター教授

ね とし まさ みつ  
根 岸 正 光

学術情報センターでは、昭和61年末に現用の HITAC M-280 H 3 台からなる電子計算機システムを更新し、62年初めから HITAC M-680 H 3 台による新システムにて、オンライン共同分担目録システム等を運用することになった。現用のシステムは東京大学文献情報センター当時の昭和59年3月に導入されたものであるから、3年弱の使用期間となる。新システムへの移行は、本センターが61年4月に国立大学共同利用機関・学術情報センターに改組されたことに伴う、事業および研究開発活動の拡大に対応するものである。すなわち、従来からの上記目録システムの運用あるいは学術雑誌総合目録データベースの編集事業などに加えて、研究者および図書館向きにオンライン情報検索サービスを提供し、また本センター独自の文献情報データベースの開発にあたるなど、新しい事業展開が図られることとなり、このため計算機能力の増強が必要であるからである。こうした事業の拡大は、当然これを支えるべき研究開発を伴うものであり、この面でも計算機能力の増強が望まれる。また目録システムにおいても、接続図書館数の増加に見合った計算機システムが要求される。

これら各般の要因を踏まえた上での新システム検討作業は、電算機借料予算の増額見込みが伝えられたのを受けて、昭和61年1月に開始された。文献情報センターの当時ではあったが、このような大規模システムの更新にあたっては慎重な検討を要するというので、センター内に新システムの仕様を検討する作業グループを設定し、予め技術的な検討を進めた。これは、4月の学術情報センターへの改組以後、新システムの選定が円滑に運ばれるようにとの配慮からであった。3月末までに10回程の会合を持ち、学術情報センターにおける新システムの要件を整理し、外部の諸先生を加えた仕様委員会にてこの結果の審議

をいただいた。学術情報センターへの改組と同時に上記の作業グループおよび委員会も改組されて、本格的な機種選定作業にあたることになった。4月中旬に要求仕様をまとめ、関連各メーカーへの説明会を催し、5月中旬、各社からのシステム提案書を受けて、具体的なシステムの選定に入るという日程である。先に掲げた本センターにおける諸事業を運営するために必要なハードウェア、ソフトウェアの構成、機能、性能などが各提案において実現されるかを評価・判断してゆくことは、なかなか難しい作業である。新システムでは、62年度から開設される自営パケット網に関連したネットワーク機能が重要な項目である。また、目録システムや情報検索システムのためのデータベース管理システムにも大規模かつ効率的な運用に耐える性能が必要であるし、そうしたデータベースを収容するオンライン記憶装置も相当の所要容量が見込まれる。さらに問題となるのは、現行システムから新システムへの移行方式である。少人数のセンターである上に、学術情報センターへの改組に伴う新規事業についての開発作業も加わるから、移行については余程綿密な検討を要する。同時に既に業務稼動に入っている目録システムでは、電算機入替に伴うサービス中止期間を極力圧縮する必要もある。このような厳しい条件に見合うシステムということであるから、提案にあたっては各社とも相当の御苦心があったことと思う。そして機種選定委員会での慎重な審議の結果、始めに記した通り、M-680 H 3台からなる新システムが導入されることになったわけである。

こうして新システムでは、処理能力がおよそ2倍強に増強されたのではあるが、先に掲げた諸事業および研究開発の円滑かつ効率的展開という観点で、2、3年後における所要能力を見積もると、必ずしも楽観を許さない。3台の処理装置の効果的な運用を図って対処してゆくことはもちろんであるが、早晚何らかの形でさらなる増強が必要になると思われる。学術情報システムが今後速やかに拡大し、また常に進化すべきシステムであることに鑑みれば、これは当然のことであろう。この際、センターへの御支持、御協力をお願いする次第である。

## 新システムの構成

学術情報センター助教授

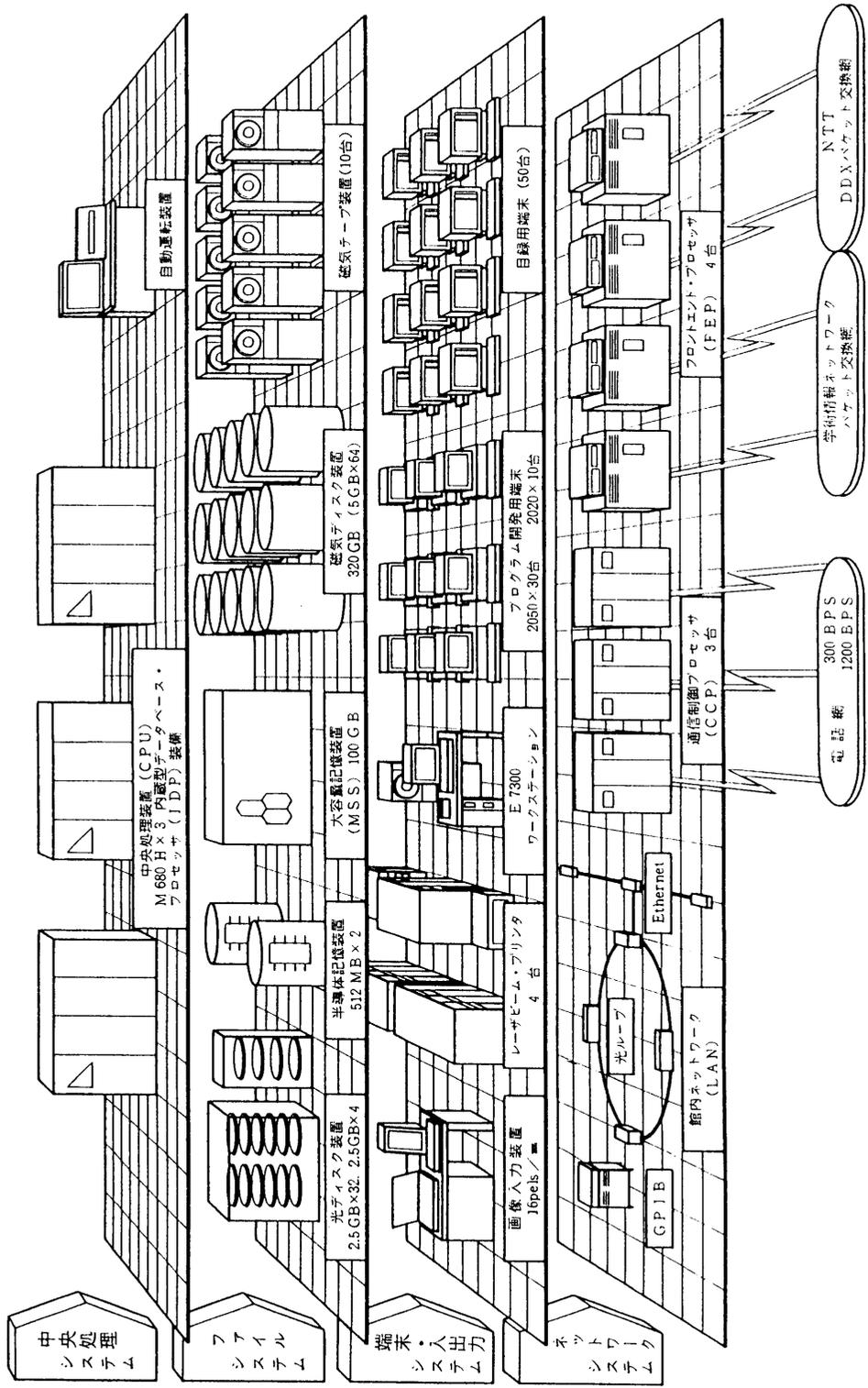
はし づめ ひろ みち  
橋 爪 宏 達

全国の大学研究者、図書館に対しオンライン・データベース・サービスを行なうためには、通常の計算機センターとは多少異なった、いわば「データベース・システム」というべき構成が必要である。このたび導入された新システムの構成を図1に示す。以下、データベース・システムとしての特徴点を中心に、主要部分を紹介する。

### 中央処理システム

中央処理システムは3系のM-680 Hを複合させた疎結合マルチ・プロセッサ・システムとなっている。おのおの256 MBの主記憶を持つ。M-680 Hプロセッサは、現時点で日立製作所の汎用コンピュータの最上位機種である。さらに、データベース検索の高速処理を行うため、IDP(内蔵型データベース・プロセッサ)を装備している。数年来、並列

図1. 新システムの構成



処理により数値計算を超高速実行する「スーパーコンピュータ」が科学技術計算の分野で話題となっているが、IDPはその技術をデータベース処理に応用したものである。IDP付加により、データベース・サービスの総合効率が、IDPを持たないM-680Hに比べて約1.5倍に向上するものと見込まれる。

3系ある各プロセッサは、サービス運用時の負荷状況に応じ、各種データベース・サービス、目録所在情報サービスなどに適宜切り換えて運用される。またデータベース・サービス・センターとしては、万一のシステム障害時には、そのプロセッサの代替となる予備プロセッサも必要である。更に、裏方作業であるデータベース更新・再編成作業のために、ユーザ向けのサービス以外にも一定範囲のシステム能力を常時確保しておく必要がある。疎結合マルチ・プロセッサによれば、上記のような諸局面に柔軟な対応が可能である。

#### ファイル・システム

ファイル・システムは、データベースの実体を蓄積するわけであるから、質・量両面で高度な性能が要求される。その中心的な役割を担うのは総容量320GBの磁気ディスク装置群である。この、日本全国の大規模計算機センターの総ディスク容量にも匹敵する記憶容量をもつディスク群は、本システムが大規模データベース・システムであることを端的に示すものである。

ディスク装置は、キャッシュ機構を備えており、高速なデータ・アクセスが可能である。一部の索引ファイルなどについて高速なアクセスをすることで、データベースの応答時間を飛躍的に改善できるため、さらに1GBの半導体記憶装置（通称ICディスク）を導入して、多様な性能向上策をとれるよう配慮されている。容量は限られているが、機械式ディスクに比べて約100倍のアクセス速度を持つ。

#### 端末・入出力システム

50台の目録端末は、旧システムから引継いだものである。主に講習会用に導入されるものだが、平時もデータベース維持作業に頻繁に利用されている。その他の一般端末（プログラム開発/研究作業用）は、従来の560/20型からビットマップ表示機能やマウスを備えた新型のワークステーションである2020/2050型に入れ換えられた。操作性（マンマシン・インタフェース）の面で、大型コンピュータ・システムは最近のパソコン等に比べて大きな遅れをとっている。これらのワークステーションが付加されたことでどれだけ操作性の改善があったか注目したいと考えている。

#### ネットワーク・システム

ネットワーク・システムはデータベース・センターの玄関口というべき役割をもつ。本システムは従来からの電話網やNTTのパケット網に加えて、学術環境専用の通信網である学術情報ネットワークとも密に連結している。利用者は従来のモデムを使った電話網経由のアクセスやN-1ネットワークによる大型センター経由のアクセスに加えて、今後は学術情報ネットワーク・パケット交換網、LANなどさまざまなアクセス経路を利用できるようになるであろう。

#### そ の 他

他にもこのシステムは、光ディスク装置、館内ネットワークなど、新しいサービス開発のための特色ある機能を備えている。これらを駆使した新サービスを開発し、その紹介をさせていただくべく、スタッフ一同努力する所存である。

# 学術情報データベースに関する調査を実施

## 企 画 係

学術情報センターでは、データベース関係事業の一環として、「学術情報データベース基本調査」と「データベース利用動向調査」を実施した。現在、両調査とも調査票の回収がほぼ終了した段階である。ここで、調査の概要を報告する。調査結果については、集計、分析が終了した段階であらためて報告することとしたい。

### 1. 学術情報データベース基本調査

この調査は、大学等における学術研究のためのデータベースの作成状況を促進することを基本の目的としている。あわせて、我が国の学術情報データベース形成を促進するために学術情報センターが行う諸事業、研究開発の基礎情報の収集という側面も持っている。

調査の概要は以下のとおりである。

#### (1) 調査対象データベース

大学等における教職員が学術研究のために作成しているデータベースで、何らかの形で公開されているか、又は将来において条件が整えば公開可能なデータベースを対象とする。

#### (2) 調査対象機関

国公立大学	465 機関
国立大学共同利用機関	12 機関
文部省所轄機関等	15 機関
合 計	492 機関

#### (3) 調査の方法

調査票を配付して、データベース作成者に記入を依頼した。

#### (4) 調査項目

データベースの名称、作成者、内容、データの特徴、データ源、データ量、収録範囲、データベースの公開/非公開、提供形態等。

#### (5) 調査期間

昭和61年10月27日～12月15日

#### (6) 回収状況

昭和61年12月27日現在で、約750種類のデータベースについて回答が寄せられている。

### 2. データベース利用動向調査

この調査は、大学等における研究者のデータベース利用の現状と、データベースに対するニーズを把握することを目的としている。この調査結果は、今後学術情報センターが行う情報検索サービス、データベース形成事業等の企画のための基礎資料として活用する予定である。

調査の概要は以下のとおりである。

(1) 調査対象者

全国の大学，研究機関等の研究者の中から無作為に抽出して依頼した。

国公立大学	126 大学	2,142 名
国立大学共同利用機関	3 機関	24 名
文部省所轄機関等	4 機関	12 名
合 計	133 機関	2,178 名

(2) 調査の方法

調査票を配付して，対象者に記入を依頼した。

(3) 調査項目

データベース利用の有無，現在利用しているデータベースの数，利用している主なデータベースの概略，年間利用回数，年間使用料，利用形態，利用が無い場合の理由，データベース利用にあたっての要望（データベースの種類，技術的・制度的要望）等

(4) 調査期間

昭和61年10月27日～12月15日

(5) 回収状況

昭和61年12月27日現在で約1,400名から回答が寄せられている。

上記の両調査の実施に際して，回答を寄せて下さったデータベース作成者（研究者・職員）の方々，また，直接回答をお願いした研究者の皆様の御協力にお礼申し上げます。また，調査票の配付，回収にあたって各機関の事務当局の多大な御協力を得ました。あわせてお礼申し上げます。

## 情報検索サービスの開始に向けて

### データベース形成係

学術情報センターでは，従来より行ってきた目録所在情報サービスに加え，このたび新たに，情報検索サービスを公開・実施することになりました。サービスの開始時期は，昭和62年4月の予定です。

目録所在情報サービスが主に各大学図書館の目録業務向けのサービスであるのに対し，この情報検索サービスは，大学等の研究者の学術研究活動，あるいは図書館における参考調査業務の直接的な支援を目指すものです。東京大学大型計算機センターのTOOL-IRをはじめ全国7大学大型計算機センター等で実施している各種のデータベースサービスやJICSTのJOIS，あるいは米国のDIALOG等と同様，当面，オンラインによる文献情報の検索サービスが主体となります。

サービスデータベースの種類は大きく外国からの導入データベースとセンターでの作成データベースに分けられます。導入データベースとしては，抄録・索引誌に対応した二次情報データベース及びHarvard Business Review誌の全文データベース，そして，目録所在情報システムの参照ファイルとしても提供されている各国のMARCデータベース，

また、作成データベースとしては、和・洋の学術雑誌総合目録データベース、及び科学研究費補助金研究成果データベース、学位論文データベースを予定しています(表参照)。

また、これらのデータベースは、研究室や図書館等に設置されたオンライン端末機から、公衆電話回線、専用回線、又は第2種パケット交換網を通じ直接センターの計算機システムに接続することにより、あるいは、各大学の大型計算機センター等を経由してセンターの計算機システムに接続することにより利用可能となる予定です。

現在、センターでは、昭和62年4月からのサービス開始に向け、情報検索システムの開発とあわせ、利用規則などの整備あるいは利用の手引き作成等の準備作業を進めています。

#### データベースの種類(予定)

	データベース名	更新頻度	データ件数 (1987.4当初予定)	データ収録範囲 の拡大予定	備考
導 入 デ ィ タ ベ ィ ス	MathSci	月次	8万件 (1985~最新版)	1972~最新版 (全件)	数学分野の二次情報DB (抄録付き)
	ISTP & B	月次	20万件 (1985~ " )	1982~ " (最近5年分)	科学技術分野の会議録 等論文の二次情報DB
	Life Sciences Collection	月次	20万件 (1985~ " )	1982~ " (全件)	生命科学分野の二次情 報DB (抄録付き)
	HBR	2ヶ月	3,200件 (1927~ " )	1927~ " (全件)	Harvard Business Review の全文DB
	COMPENDEX	月次	55万件 (1981~ " )	1976~ "	工学分野の二次情報DB (抄録付き)
	Ei Engineering Meetings	月次	20万件 (1985~ " )	1984~ "	工学分野の会議録論文 の二次情報DB (抄録 付き)
	LCMARC	月次	40万件 (1985~ " )	1968~ " (全件)	米国議会図書館作成の 図書目録DB
	LCMARC (S)	3ヶ月	30万件 (1973~ " )	1973~ " (全件)	米国議会図書館作成の 雑誌目録DB
	JPMARC	週次	15万件 (1985~ " )	1969~ " (全件)	国立国会図書館作成の 図書目録DB
作 成 デ ィ タ ベ ィ ス	目録所在情報デー タベース(和雑誌)		書誌 4万件 所蔵 100万件	書誌 4万件 所蔵 100万件	学術雑誌総合目録 和文編
	目録所在情報デー タベース(洋雑誌)		書誌 9万件 所蔵 62万件	書誌 9万件 所蔵 62万件	学術雑誌総合目録 欧文編
	科学研究費補助金 研究成果データベ ース	年次	2,800件 (1985)	1985~最新版	科学研究費補助金によ る研究成果報告のDB (抄録付き)
	学位論文データベ ース		5,000件 (1984/85)	1984~ "	博士学位論文のDB

## 米国の図書館の印象

— スタンフォード大学 —

学術情報センター助教授

あ だち じゅん  
安 達 淳

### 1. はじめに

私は、文部省の在外研究員として、1986年3月から6ヶ月間米国に滞在し、主として分散情報処理やデータベースに関する研究を行うことができた。この機会は私個人にとっても非常に幸運といえるもので、米国におけるこの方面での活動状況を肌で感じることができ、また文献情報センターでのシステム開発の仕事を外から距離をおいて眺めることもできたという意味で、絶好の機会であった。この6ヶ月のうちの初めの2ヶ月はスタンフォード大学に滞在して、米国の書誌ユーティリティとLCとを相互に接続しようとする Linked Systems Project (LSP) についていろいろ調査したり、スタンフォード大学構内にオフィスを構えるRLG (Research Libraries Group, Inc) に出入りして、RLGのLSPに対する取り組みの方向性について意見をうかがったりしていた。

今回は、この期間に何度も訪れ、また利用もしたスタンフォード大学の図書館について、私の印象を紹介したいと思う。

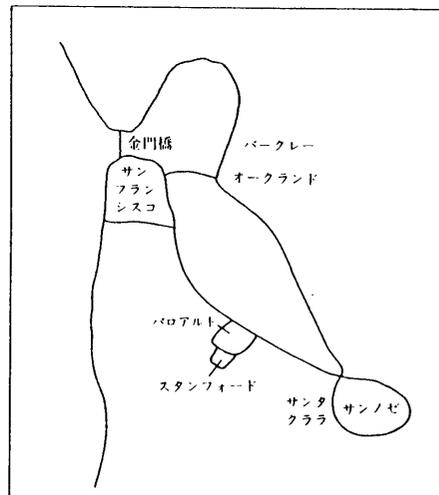
米国カリフォルニア州のサン・フランシスコを中心とする地域は、現在、情報産業や先端技術分野での米国内の最大の拠点となりつつある。半島の突端に位置するサン・フランシスコ市自体はこじんまりとした、ちょっと気取った町である。しかし湾地域 (Bay Area) として対岸のオークランド市、バークレー市、

半島を下ったサンタクララ市、サンノゼ市を含め、大メガロポリスを構成している。気候的には温暖で、夏もさほど暑からず、また雨期である冬も雪の降ることは決してないこの半島地域は、米国でも最も暮らしやすい場所の一つであろう。しかし、それだけに人口密度は高く、物価も高いようにみうけられる。

(ちなみにカリフォルニア州の人口は2千万人を越え、米国人の10人に1人はカリフォルニア人ということである。)

サン・フランシスコから半島を南に下ると、パロアルト市、サンノゼ市などの美しい郊外住宅町が連なり、その中にコンピュータ・半導体を中心とした先端技術企業が散在してい

図1. 湾地域 (Bay Area)



る。この一帯が、“シリコン・バレー”と俗称されている地域である(図1)。

米国の通弊である公共交通機関の衰退はこの地域でも顕著である。一応汽車やバス、またサン・フランシスコの周辺とバークレーでは地下鉄が走ってはいるが、日常の足としては頼りにならない。結局、自動車を使うのが時間と費用を勘案すると最も経済的である(とにかくガソリンが安い)。特にサン・フランシスコからシリコン・バレーにかけてはフリーウェイが発達しており、車なしの生活は考えられない。

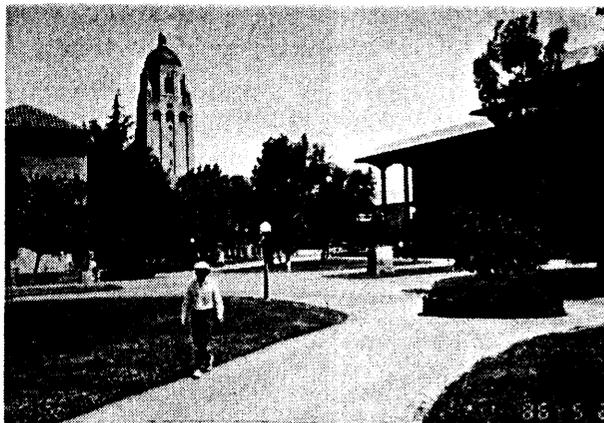
この地域の大学では、カリフォルニア大学バークレー校(バークレー)、スタンフォード大学(パロアルト)が著名で、その活動は全世界から関心を持たれている。また周辺のシリコン・バレーの諸企業とのつながりも深いようである。

## 2. スタンフォード大学

スタンフォード(Stanford)大学は、米国西海岸随一の総合私立大学として高い評価を得ている。パロアルトの町に隣接して、約33平方キロ(8200エーカー)にわたる広大な敷地を有し、構内にはフリーウェイ280号線が、長さ2マイルの素粒子実験用線形加速器(SLAC)を横切る形で走っている。この敷地の大部分はなだらかな丘陵であり、大学の建物自体はごく一部にかたまっている。低層の赤い瓦のスペイン風の美しい建物は、ちょうどサン・フランシスコ空港に降りる飛行機からはっきりと認めることができる。敷地の一部は民間に貸しており、9ホールゴルフ場、高級ショッピング・センター(カリフォルニア随一と言う人もいる)もある他、電子機器メーカーのヒューレット・パッカド社の本部まである。この例に見る多角的な経営により、スタンフォード大学は米国内でもずば抜けて裕福な大学のようなものである。

スタンフォード大学は、文系から理工系に至る学部レベルの学科が設置されている他、軍縮等の研究で有名なHoover Institution(ちなみに米国では軍縮の代わりに、軍備管理-arms controlという言葉を使うことが多いようだ)、医学部、経営学(ビジネス・スクール)、理工学方面などの高レベルの大学院を持っている。但し、農学、図書館学に関する学科はない。

ノーベル賞受賞者13人を含む2,000人を越える教官陣のもとで、学部学生約6,500、大学院学生約6,500が在学している。職員は全体で13,000人ほどである。授業料の高い私立大学であることもあって、学生はよく勉強をするという世評である。留学生の数も多く100ヶ国から2,000人を越す人々が集まっている。日本からは現在大学院・病院を中心に約100人ほど訪れていると聞が、もっぱら企業からの派遣と医者などの短期の



フーバ塔と右手のメイヤー図書館(学部学生用)

中央の像はロダン作、グリーン図書館は、中央の木かげにある。

研究者が中心のようである。特に韓国からは100人を越える若い人（母国で修士を取った位の人）が、Ph.Dを目指して頑張っているのが目についた。教官の給料も米国内でトップクラスで、9ヶ月分給料の平均で、教授6万3千ドル、準教授（Associate）4万3千ドル、助教授（Assistant）3万5千ドルとのことである。

### 3. スタンフォード大学図書館の概要

スタンフォード大学図書館（Stanford University Library）も、大学図書館の通例として、小さな学科レベルの図書館/図書室に分かれており、20近くの建物に分散した形態になっている。この中で Cecil H. Green 図書館が中心となる図書館であり、ここが教養、理工学、音楽などの図書館をすべて管轄し目録作業を行なっている。1985年で年間約6万の目録をとり、総蔵書数は約290万冊である。さらに Hoover Institution や医学部、経営学大学院等が独立した図書館組織を持つ。これを合わせると、蔵書数は約530万冊となる。これら全体を合わせて、スタンフォード大学の図書館が構成されている。表1に、米国内の有名大学の蔵書数を示す。またスタンフォード大学の図書館全体に関する1985年の様々な数値を表2にまとめた。抱える学生、教官数から見て、スタンフォード大学は恵まれた環境にあるといえる。587人の図書館職員のうち専門職（Professional Staff）は155人である。他はサポート職341人、時間職91人となっている。そのうちGreen図書館における整理作業には約65人が費やされている。

表1. 米国主要大学の図書館の蔵書と職員（1984—85）

	所蔵数	年間増加数	職員数
Harvard	10,798,429	131,470	1,001
* Yale	8,192,144	147,379	595
Illinois	6,808,048	192,498	551
* Univ. of Calif., Berkeley	6,610,872	106,642	721
* Michigan	5,805,748	123,079	545
* Columbia	5,459,972	82,966	553
* Stanford	5,318,153	141,065	587
UCLA	5,172,607	192,657	692

\* RLGメンバー校

表2. スタンフォード大学図書館の1985年の主な数値

・ 支出全体	2,500万ドル
(主な内訳) acquisition	575万ドル
給料	1,640万ドル
・ オンライン目録システム	24万ドル
RLIN	66万ドル
・ 一冊の本の購入から処理にかかる平均経費	約56ドル
雑誌1タイトルに付き年間	約169ドル
・ 司書の給料の中央値	34,000ドル
” 最低	24,000ドル
学生の時間給の中央値	6ドル3セント

#### 4. 図書館の方向性

スタンフォード大学図書館では、今後学術資料の生産/流通における経済的、技術的な情勢の変化、教官・学生側での資料や図書館への依存様式の変化等によって、研究図書館は大きな衝撃を受けると強く認識している。学術的資源についてダイナミックな支援と促進を行うことを図書館の第一の責任と位置付け、常に図書館の使命や活動目標の見直しを行っているようである。その使命/目標の内容は多分に理想的な面もあるが、コンピューター化の方針や他機関との相互協力については、具体的な計画をも合わせ持っている。この中で、目についたことをひろくと、

- ・学術環境 (academic community) の情報ニーズを再認識・再評価し、図書館と学術研究コミュニティとの間で、より効果的な連携体制を築く。
- ・目録整理の遅れをなくす。
- ・カード目録のオンライン目録への積極的な遡及入力を行う。
- ・自動化情報システムの開発、オンライン目録の強化、RLINとの統合化、学内の各種計算機資源との電子的な結合
- ・さまざまな図書館ネットワーク (local, regional, national network) の推進と参画。などが挙げられる。

#### 5. スタンフォード大学図書館でのコンピュータ利用

スタンフォード大学図書館におけるコンピュータ利用の歴史は古く、1960年代後半までさかのぼる。スタンフォード大学図書館はスタンフォード大学の経営、管理方面の計算機部局であるITS (Information Technology Services, この部局の旧名称はCIT the Center for Information Technology であると思われる) との密接な協力のもとに、BALLOTSという図書館システムを作り上げた。これは多図書館向けのシステムに発展させられ、1978年にはRLG (1974年発足) によって、RLINシステムとして運用されるに至った。従ってRLGはスタンフォード大学、特に計算機システムの運用を担当するITSと密接な関係にあり、RLINの運用にはITSに負うところが多い。ITSは300人程の職員を抱え、その内プログラマ80人程を擁している。計算機システムは我が国の大型計算機センターの規模をしのぐものを持っている。なによりも素晴らしいことは、システム設計からソフトウェア開発に至るまでITSの内部で積極的に進めているということであり、日本の大学では考えられない状況である。

1978年のRLGによるBALLOTSの採用に伴い、スタンフォード大学図書館もRLGの会員となり、RLGの本部もスタンフォード大学内に設置されることになった。しかしスタンフォード大学図書館自身は、RLINの前身時代の1972年から目録の機械化を行っていることになる。

スタンフォード大学図書館では、基本的にRLINに基づいて業務を行っている。集書、目録、相互貸借、参考などに、約130台のRLIN端末を利用している。但し、CJK (Chinese-Japanese-Korean) 端末については1985年現在において、テスト使用中ということである。

一方、スタンフォード大学図書館の目録カードに代わるオンライン目録システム Socra-

tesが、1983年よりサービスされている。このシステムも、RLINと同じITS所有の計算機システムの上に載っている。スタンフォード大学図書館とITSがBALLOTS, RLINの開発経験をふまえて、わずか8ヶ月で作り上げたものであるが、概念的にはRLINとはまったく切り離されたシステムである。

従来、Green図書館のカード目録の形で維持されてきた学内総合目録に代わって、1972年以來RLINで築き上げられてきたスタンフォード大学図書館目録レコードがSocratesの元データとなっている。1985年11月現在で、123万4千レコードであり、蔵書中の1/5程度である。RLINを使用して作られた書誌所蔵レコードを、週1回磁気テープで移して最新のデータをサービスしている。これに伴い、1986年8月から目録カードのファイリングをやめるとのことである。年間約80万枚に達する作業であった。

図書館内には53のSocrates端末が置かれ、図書館利用者に供されている。図書館内での利用はもちろん無料であるが、ITSの計算機利用資格があれば図書館外から電話でアクセス可能である。但しこの場合は有料で、日中の繁忙時の場合は、1時間当たり\$10~15の料金となる。システムの稼動時間は、午前6時から真夜中であり、土、日曜日は若干短縮される。

システムの特徴としては、

- ① 分かりやすい、システム主導のガイド型モードと、慣れた利用者向きのコマンド型のモードの2つがあること。
- ② 著名、タイトル、主題等各種のキーワードでの検索が可能なこと。
- ③ AND, ORなどの操作の他に、直前の操作の前の状態に戻るコマンドや、同じ検索を別ファイル(図書、雑誌、楽譜、地図、フィルム、すべての目録などいくつかの範囲を設定できる)で行うというような支援コマンド、HELP機能が強化されていること。
- ④ 整理中の資料の検索ができること。

などがあげられている。

現在検討中のSocratesの課題としては、過去の目録の遡及変換、ファイルの種類を豊富にすること、商業データベースとの統合化、SDI風の定期的な検索サービス等が挙げられている。

スタンフォード大学図書館の今後のコンピュータ利用の拡大方向は、次のような優先度で考えられているようである。

- ① 典拠コントロール
- ② 雑誌管理
- ③ 貸出返却
- ④ 集書
- ⑤ 目録入力

この優先順位は、RLINの実績、システム開発、業務移行等を勘案しての方針であろうが、我が国の図書館のアプローチとは随分違うように見受けられる。これらは、前節で紹介したような全体計画の中に位置付けられて進められていくと思われるが、具体的な活動を行う組織は、スタンフォード大学図書館から4~5人、ITSからも同程度参加する実務的なコア・グループとのことである。ここで検討されている内容を列挙すると、次のようになる。

- a) “Automated Information Services” としてとらえる。

情報へのアクセス/流通が電子化することを前提に、図書館サービスを考えていかなければならないことを強調し、「学術研究の電子化 (Electronic Scholarship) への支援」を考えている。例えば、この数年でPC (Personal Computer) がすべての研究者・職員に行き渡るとか、LANの利用というような学生・教官等の研究環境の変貌を大前提として、Automated Serviceを考える。

- b) セルフ・サービスが主流になる。しかしながら司書や “Subject Specialist” は、10年後も変わらず重要と考えている。但し、“Subject-expertise” という側面の要求がだいに強まると予測している。

## 6. 典拠への関心

前節の機械化計画の筆頭にあった典拠コントロールとは、既存の書誌レコードの中に See Also 等のフィールドを取り込み、レコード検索の柔軟性を高めたいというものである。端的に言えば、“Samuel Clemens” という検索入力で、マーク・トウェーンの書誌レコードを捜せるようにしたいということである。

一方LCの主導するNACO (Name Authority Cooperative) Projectにも、スタンフォード大学図書館は加わっている。NACOは、LCにおける典拠データベース作成に対する図書館からの協力によって成り立つもので、各現場から典拠レコードを集めて、LCに送るという作業を継続的に行うものである(ちょうど学術情報センターの学総目作業と同じ形態である)。1985年2～3月に、数週間の教育がLCで開催され、スタンフォード大学図書館からも一人参加した。この人がコーディネイターとして現在NACOの作業を図書館内で取りまとめているわけである。LCにおける教育の後、6ヶ月のトレーニング期間が設けられる。学総目で配布されるような記入用紙にヘディングを記入してLCに送付し添削をうけるわけである。現在は、スタンフォード大学図書館内の6人がNACOに関係しており(ただしフルタイムでNACOの作業をしているわけではない)、これをコーディネイターがチェックし、取りまとめを行ってLCに毎月郵送している。月々の送付件数は40～90件ということであるが、LCでのチェック・登録にはさらに数ヶ月を要しているようである。図書館内での作業は、RLINの典拠レコードを検索したり、スタンフォード大学図書館の典拠ファイルを見たり、必要に応じてマイクロフィッシュを捜したりしながら記入用紙を埋めていくという、面倒かつ慎重な手順になっている。スタンフォード大学図書館のLCに対する協力的姿勢が印象的であった。今後、NACOの作業はLSPによるネットワーク上のレコード転送によって行なわれるようになるものと予想される。

## 7. おわりに

以上に述べたように、スタンフォード大学図書館におけるコンピュータ利用については、決して先を急いで作業が進められているわけではない。他の米国内の機関を訪れて、私は、今米国の書誌ユーティリティや図書館ネットワークは転換期にあるとの印象を持ったが、スタンフォード大学図書館も、RLINの変貌と歩調を合わせ、自らの行く方向をゆっくりとしかし着実に見定め動いているようである。その際には図書館内部のみならず、大学内外のコミュニティとの新しい連携を確立することを模索しつつ、新たな図書館の地位を

築き上げようとしていると思われた。

以上のような調査にあたっては、RLGのR. McCoy氏や、スタンフォード大学図書館のP. Mosher氏の好意に負うところが大きかった。また、私のスタンフォード滞在全般にわたっては、J. R. Pierce先生に大変お世話になった。Pierce先生は衛星通信等の分野で大きな業績をあげられた方であるが、じつは「トランジスタ」という言葉の命名者でもある。ベル研究所におられたときに、同僚のトランジスタ発明者のショックレーらに頼まれて、一晩で名前を考えついたそうである。このようなお話を私にしてくださった夫人のエレンさんは、私が米国を立つ直前に急逝された。Pierce先生御夫妻からうけた数々の御厚誼に感謝しつつ、誌上をかりてPierce夫人の御冥福を心からお祈りする次第である。

## 第2回学術情報センター・シンポジウム（予告）

標記シンポジウムを下記により開催いたします。詳細は既に関係各機関等に御案内のとおりです。お繰り合わせのうえ、ふるって御参加下さい。

日 時： 昭和62年2月26日（木） 9時30分～16時40分

会 場： 名古屋大学経済学部第1講義室

テーマ： 目録所在情報システムにおけるシステムベンダーの役割

講演者： 猪瀬 博 学術情報センター所長

宮澤 彰 学術情報センター助教授

森岡 祐二 名古屋大学附属図書館学術情報課長

大多和英行 ファコム・ハイタック株式会社  
ハイタック本部システム第4部長

平野 哲 日本電気株式会社  
情報処理官庁システム事業部第3システム部課長

佐橋 秀夫 富士通株式会社  
第2システム統轄部文教システム部第1システム課長

日高 睦行 日本アイ・ビー・エム株式会社  
教育システム営業部システム課長

司会： 井上 如 学術情報センター研究主幹

## 北海道大学 (NEC) 図書館仕様端末とケース2 開発

北海道大学附属図書館  
学術情報課情報処理掛長

う の ひろ すみ  
宇 野 弘 純

北海道大学附属図書館では、①学術情報センターへの登録を行うと同時に北大側のファイルにデータを取込む方法、いわゆるUIPケース2の開発と、②北大側へ取込んだ後の処理を行う北大目録システムの開発を並行して行ってきたが、このほど両システムが完成し、センターへの目録・所在情報の本格的登録を開始した(試行的登録は昭和61年7月開始)。全学の図書館・室の全端末から登録が可能であるが、同時接続可能台数は40台である。UIPについては大阪大学で開発されたプログラムを継承し、ケース2へ発展させるとともに、特に操作性の向上に意を注ぎ、学術情報センターの助言の下に新たに図書館仕様端末の開発も行った。ケース2による処理の詳細については別に報告することとし、図書館仕様端末についてその機能と特徴を紹介する。

キーボードは図1に示したように、通常の英数・かなの他に、ALA拡張文字およびキリル文字の直接入力可能なものである。特徴としては、①全ての文字をキーボードの文字部に集中して配置した。②ALA拡張文字シフトおよびキリル文字シフトはいずれも英数カナシフト同様の使い勝手である。③ALA拡張文字については、最上段が合成を許さない文字、2-4段が合成に使用する記号で、明確なグループ化をはかった。④合成記号はまず記号を打鍵し次いで文字キーを打鍵すると文字が合成されて表示される。

図1. 図書館仕様端末キーボード

CTRL +	インサート			補助説明	画面切換	画面分割	調整														カナD7字			1/2 Half	部番選択	外字
FNC +										先頭表示	290-8773	290-8773	移動	転写												到達
単押下										フィールド出力	フィールド追加	フィールド拡張	フィールド削除	削除	挿入	一字削除	一字挿入	リフ	機能実行	再表示						
FNC	PF1	PF2	PF3	PF4	PF5	PF6	PF7	PF8	PF9	PF10	PF11	PF12	PF13	PF14	PF15	PF16	PF17	PF18	PF19	PF20	PF21	PF22				

ALA 拡張文字	1	2	3	4	5	6	7	8	9	0	-	+	BSKIP	SKIP	RE SET	7	8	9	/	
	ス	フ	ア	ワ	エ	カ	キ	ク	コ	セ	シ	ソ	リ							1
TAB	Q	W	E	R	T	Y	U	I	O	P	6	[	]	TAB	-	4	5	6	*	
	ク	ウ	エ	カ	キ	ク	コ	セ	シ	ソ	リ	リ	リ							
CTRL	CAPS	A	S	D	F	G	H	J	K	L	:	*	]	-	-	4	5	6	*	
		ア	ス	ド	フ	グ	ハ	マ	カ	リ	レ	ケ	ム							
	SHIFT	Z	X	C	V	B	N	M	.	>	/	0	-	SHIFT	-	1	2	3	-	
		ズ	ク	ソ	ブ	ン	ム	ド	フ	リ	ル	ノ	バ							
キリル文字	英	数	無変換	(スペース)				変換	じらかな	カナ	全角	半角	実行	送信	0	000				+

さらに、この端末の日本語処理（ワープロ）機能は、単漢字変換ではなく、文節変換方式なので入力効率が効率的である。

UIPにかかわる「ローカルコマンド」としては、表1に示したような機能を備えている。同一の機能を、①ファンクション（PF）キーを押す、②画面のコマンド入力域にコマンドとして入力するという2方式で実行できる汎用性の高いものとしたが、PFキー使用を主として運用を行っている。

機能的特徴としては、①参照MARCからの流用の際に書誌構造の違いから発生するフィールド間のデータ移動を可能にするために、「移動」および「複写」の機能を持たせた。② 北大側のファイルへの取込みは画面単位にPFキーあるいはコマンドで指示する方式とした。②については、汎用性が高い反面、複雑な画面展開が必要な場合に、データの取込みを忘れる可能性が考えられるので画面の追加取込みを可能にしている。

表1. ローカルコマンド

機 能	PFキー	コマンド	備 考
ファイル出力 表示されている仮想画面をIFFに出力（取込む）	ファイル出力	#W	
プリンタ出力1 表示仮想画面を印刷	プリンタ出力	#P	
プリンタ出力2 表示物理画面を印刷	ハードコピー	#HD	
先頭表示 スクロールエリアを仮想画面の先頭にセットし表示	先頭表示	#I	
スクロールアップ 画面の続き部分を表示	スクロールアップ	#L±l	lによって行数指定が可能
スクロールダウン 画面の直前部分を表示	スクロールダウン	#L±lp	lpによって頁数指定が可能
削除 指定の文字列を削除	削 除	—	1フィールド内に限定
挿入 カーソル位置の前に文字列を挿入	挿 入	—	1フィールド内に限定
1文字削除 カーソル位置の文字を削除	1 字 削 除	—	
1文字挿入 カーソル位置の前に空白を挿入	1 字 挿 入	—	空白部に文字入力
フィールド追加 カーソルがあるフィールドと同一フィールドを作成	フィールド追加	#A l	lは追加するフィールドの行数
フィールド拡張 カーソルがあるフィールドの入力域を行単位で拡張	フィールド拡張	#[ l	lは拡張するフィールドの行数
フィールド削除 カーソルがあるフィールドの削除	フィールド削除	#D	
移動/複写 文字の移動あるいは削除	移 動 削 除	—	指定のフィールドへ移動、複写が可能
コマンド カーソルをコマンド入力部へ移動	コマンド	—	

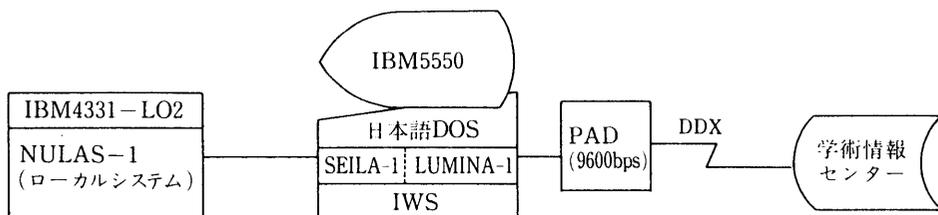
## 接続のあとさき

南山大学図書館情報管理課長

はら だ さとる  
原 田 悟

南山大学はV T S S方式で学術情報センターに接続した。極めてコンパクトな接続方式であって、バジェットの比較的少ない中小の図書館にとっても高い接続可能性を実証し得たものと考えている。図1の接続概念図に沿って機能的な説明を施すと次のようになる。つまりIBM5550(パソコン)に日本語DOSの下にUIPソフトである「LUMINA-1」とローカルシステム⇔センターシステムとの間のデータフォーマット変換を行うソフト「SEILA-1」、及びオペレーターが両システム間をメニュー選択の形式で自由に渡り移ることを可能にするソフト「IWS」の3つを搭載することによって、ある意味で既存ローカルシステムとの全面連動を計ったという簡単なものである。これ等3つのソフトについてもソフトウェアハウスと南山大学による、ほぼ自己開発になるものである。

図1. 接続概念図



さて、標記の「接続のあとさき」についてであるが、これには2つの意味がある。どこかの商業ではないが個々の図書館にとって接続前、接続後ではどのような変化がみられたか（情動的に痩せていた図書館が健康体の図書館になるか？）という意味と、接続そのものの時間的なあとさき（今すぐ接続すべきか、もう少し様子を見てから接続すべきか）という2つの意味である。この場合、いずれの見方についてもセンターシステムの評価と関連するものであるが、単にそれのみに留まらず接続館側のシステム開発能力及びセンターシステムとの取り組み姿勢の有様の自己評価とも大きな関連をもっている。私見を述べるとすれば、センターシステムに接続するという事は先ず第一に「ネットワークシステムに参加」するということであり、参加館はネットワークシステムの中で検索、目録作成、データ流用（目録作業及びその他の作業についても）等々センターシステムから享受し得る機能を自館の運営に照らして最大限有効に取り込むことができるかということが接続のあとさきを考える上での大きなポイントだと考えている。これとは別にもう1つ大切なことはネットワークシステムは参加館の好むと好まざるとにかかわらず、ホストシステムの公準が参加館にとっては所与のものとならざるを得ないということであり、これ

も先ず念頭におかなければならないであろう。

このような観点で接続のあとさきを考えて見たとき、はたして南山大学としてはどのように評価をしているのであろうか。検索においては大型データ・ベースの検索が随時行なえる環境になった（UIPソフトのみで可）、発注データとしての書誌の流用についてもSEILA-1というフォーマット変換ソフトの開発をとおしてオリジナル入力よりもかなり効率的になった（UIPソフト+参加館独自のソフトの連動）等々は顕著な事例であろう。それでは目録作業はどうかといえばセンターシステムの入力基準（ネットワークシステムの所与の公準）と既存ローカルシステムの整理基準（参加館独自の公準）との折り合い（開発負荷にたえるか乃至はあきらめるかのどちらかの選択）が完全にはついておらず、まだこれからといった段階であると考えている。つまり未だはっきりとした評価を下し得ないというのが実情である。換言すればネットワークシステムの評価を下すためのデータが接続後半年という段階ではまだ揃わないということである。

少なくともネットワークシステムの評価に際しては参加館にとってデータの循環（ホストシステムにウエイトをおいた業務での検索・流用・処理とローカルシステムにウエイトをおいた業務での検索・流用・処理…これに接続というポイントを与えると8の字循環回路になる…現時点での参加館の接続方式の多くはこの循環回路しかとり得ない）を最低一循しない内は評価自体が無意味なのではなかろうかと考えている。

蛇足ではあるが、現時点でよく聞かれるセンターシステムの入力基準に関する批判については、目録業務における使い勝手の問題もあるが、学術情報センターの当ネットワークシステム上の役割の不明瞭さにも起因する問題だと考えている。多くの図書館にとってはローカルシステム的にはオンライン目録であれ、カード目録であれ、現状の階層構造を持たない目録を維持したいというニーズが底流にあるものとわれわれは考えている。こういったニーズに対して学術情報センターが磁気テープであれカード目録であれ数種の標準的な目録タイプの提供を可能としそのサービスを参加館が選択享受し得る体制をとれば批判の声は比較的小さくなるのではなかろうか。なぜならば、センターシステムのデータセットにエレメント上の不備はないからである。

さてこういった状況の下で接続過程及び若干のその後を経験した立場から一般論としての接続のあとさきについてこの小文のまとめの意味も含めて少し述べてみたい。なおこのことが未接続館の参考になれば望外の喜びである。

「接続する」ということは図書館にとって夢でも希望でもない。これはあくまでも計算である。図書館運営の機能計算上の結果にもとづく行為である。ある意味で私学のように行政的影響力のなにも無い立場での選択環境におかれている場合はセンターシステムの機能を徹底的に検討し固有の業務のそれぞれの局面でセンターシステムとの接続がどのような結果を導き出し得るかを予測可能にすることがまず第一である。そしてそれぞれの局面での予測を総合して図書館トータルでの予測を立てるべきである。そしてこの予測の前提としてその予測（計算）は如何なる技術環境下で計算したものかをあきらかにすること、言い換えれば、効果予測を技術との関数関係下でとらえることが必要である。そしてこの技術が所与のものか（パッケージであれ、個別ソフトであり既成のものか否か）、開発を要するものかの見極めもしておく必要がある。これらを総合的に判断して接続を実施した場合必ずやあとさきの関係に於て有意な変化がみられるものとなるであろう。

もう1つの接続の時間的あとさきについてであるが、これについては2つの見方をしている。ある程度機器環境も整いシステム的な技術対応能力も兼ね備えている図書館は現時点においても積極的に参加し、ネットワークシステム全体のバージョンをアップする努力を傾注することがシステム全体の発展につながるものと考えている。言い換えれば早い時期の接続をよしとする考え方である。他方機器及び技術対応能力ともに十全でない図書館については将来の参加は自明のこととして、ある程度様子を眺めるのも1つの選択ではなかろうかと考えている。センターシステムはネットワークシステムとして、未だ未定着の部分を多少残している。機能的にみたホスト環境においてもデータセットについても然りである。これらの未定着な部分は近々安定するものと考えるが、その時点で接続をしても遅くないといってよいのではなかろうか。

最後に、南山大学はなぜ早期接続に踏み切ったのか。これは上記の内容と矛盾するのであるが、図書館運営の構想と学術情報システムを複合的に把えある種の「夢」を追いかけてしまった結果である。そのことの見返りとしてシステムの対応という観点でいま現在特別な苦勞を味わっている。けだし楽しい苦勞である。



## I F L A 東京大会国際図書館情報総合展に 目録システムを展示

学術情報センターは、I F L A 東京大会（昭和61年8月24日～27日）に付帯して行われた国際図書館情報総合展において、目録システムの展示を行いました。

ホテルニューオータニの展示会場に設置した目録端末をとおして、学術情報センターの目録所在情報サービスの実演を行い、我が国にもビブリオグラフィック・ユーティリティが実現したことを見学者に強く印象づけました。実演には、当センターの教官、タスクフォースがあたり好評を得ました。実演をとおして国内外から集った図書館員との交流も行われ、例えば、Susan Martin（米国の図書館ネットワークの第一人者）が端末の前に座り込んでセンター教職員と議論する場面も見られ、今回の展示は大きな意義があったと言えましょう。

なお、今回の展示は、目録システムを利用することができるコンピュータと端末をもっているコンピュータメーカー4社に対して参加を呼びかけ、その内、日立製作所とIBMの協賛を得て行われたものです。

また、展示会場では、学術情報センター要覧等の印刷物の配付も行い、学術情報センターが単に図書情報に限らない幅広い学術情報流通のための機関であることをアピールしました。

## 学術情報センター目録システムを利用して

— 和図書の入力実験をふりかえって —

名古屋大学附属図書館  
学術情報課第一情報資料掛

なか い えり子  
中 井 えり子

学術情報センターの目録システムで和図書の目録登録を行なった実験レポート<sup>(注1)</sup>を脱稿してから二ヶ月余りたった。データベース中のレコードは生き物のようで、端末操作にも目録登録の手順にすっかり慣れたつもりでも、画面を開くたびに現れる書誌レコードや典拠レコードの表情が日々様ではなく、思いがけないレコードに出会うのが面白くて、さらに二ヶ月実験を続けてしまった。業務外の実験なので入力件数はさほど増えなかったが、前回の集計結果に今回のデータを加えたものを以下に掲げる。但し、集計結果の傾向がほとんど変らなかったことと、紙面の都合で、「入力件数及び入力時間」と「書誌階層の出現率」のみとし、今回は入力データに関して、参照ファイルのレコードを流用した場合の修正・追加箇所の調査<sup>(注2)</sup>はしなかったことをおことわりしておく。期間は、昭和61年3月5日から9月25日に続けて、9月26日から11月28日までで、その他の実験概要は前稿のとおりである。

集計結果(1) 入力件数(所蔵をつけた書誌単位の数)及び入力時間

入 力 件 数 (件)			入 力 時 間		
			総入力時間	1件当りの 平均 値	
			1,486 (362)	13,360 (分) (3,092)	8.99 (分) (8.54)
入 力 方 法 別 内 訳	a. 参照ファイルにヒット	1,121 (248)	9,949 (2,180)	8.88 (8.79)	
	b. NCにヒット	142 (70)	834 (437)	5.87 (6.24)	
	c. 参照ファイル又はNC中の 似た書誌から流用	215 (40)	2,473 (422)	11.50 (10.55)	
	d. オリジナル入力	8 (4)	104 (53)	13.00 (13.25)	

注) a.参照ファイルにヒットしたものの内訳は

JP/MARC 958件(173件)

TRC/MARC 163件(75件)

小数点第3位以下四捨五入

( )内は9月26日から11月28日のデータ

入力件数について補足しておく。TRC/MARCが搭載された8月4日以降の入力件数は581件でその内訳は、TRCにヒット……27.9%、JPにヒット……45.1%、NCにヒット……16.2%、コピーカタロギングを含むオリジナル入力……10.8%である。

事前に前稿をみていただいた方々から、入力時間が短かすぎるとの評を受けた。入力の条件は前に記したとおりであるが、誤解のないようにつけ加えると、1) 後日気がついた入力ミスの修正時間は含まれていない。2) Case 2によるローカルシステムへの取込み(LSAVE)時間は含まれていない。3) 他の業務との関係でレスポンスのよいと思われる昼休み時間に作業したこともある。4) データ入力レベルに関して、並列標題、原書名以外のその他の標題、オリジナル入力の際の件名は入力していない。5) 目録情報の基準で解釈の難しい書誌は入力をみあわせた、等がある。

今回の集計結果では、前稿と比べると1件当りの入力時間は、その入力方法によって±1分以内で増減があったが、平均値は8.99分で前回の9.14分より若干短くなった。所要時間別の件数も、参照ファイルかNCにヒットすればその87%が3～12分の間に集中しており、最も件数の集中した5分と6分で約30%を占めた。

書誌階層の現われ方は次のとおりである。

集計結果(2) 書誌階層の出現率

階層の持ち方	書誌件数	%	
階層なし	868 (192)	58.4 (53.0)	
2階層	603 (164)	40.6 (45.3)	
構造の種類 a	内数 { 307 (67)		
構造の種類 b			296 (97)
3階層	15 (6)	1.0 (1.7)	
構造の種類 a-a	内数 { 3 (2)		
構造の種類 b-a			6 (1)
構造の種類 b-b			6 (3)
計	1,486 (362)	100.0 (100.0)	

注) 3階層の構造の種類は子書誌から親書誌の関係  
 小数点第2位以下四捨五入  
 ( ) 内は9月26日から11月28日のデータ

階層のないものが、前回60.1%だったのに対し、今回58.4%となり、わずかに階層をもった書誌が増えているが、やはり4階層以上の事例にはあたらなかった。

また1書誌レコード当りの親書誌、著者名典拠、統一書名典拠のリンク数は、リンクの種類を問わず3回までのものが96.3% (前回は96%)、最少0回、最多7回 (前回は最多9回) で、洋図書に比べても少ないようである。

以上のように集計結果については前回と傾向はほとんど変わらないので、前稿であまり触れなかったNCに既に登録されたレコードに関して言及したい。

業務モードでの接続機関が、実験を始めた3月には3機関であったのが、その後毎月1～2機関増えて、11月には12機関となった。また東大の週及入力が9月半ばに始まったこ

ともあって、NCへのヒット件数はこの2ヶ月で倍となり、全入力件数に対して9.6%（前回は6.4%）となった。NCへヒットすれば、他の入力方法に比べて早く処理できるのではあるが、前回5.51分であるのに対し、今回6.24分かかってしまっているの、その原因を考えてみると、

① 各巻に固有の標題をもたない多巻物の続巻を入力する時期に来て、自機関の所蔵が既に登録してある場合、所蔵流入入力画面での操作に手間がかかった（NCにヒットした書誌のうち約30%がVOLフィールドの追加であった）。

② 入力ミスの修正

③ 各機関が選択したデータ入力レベルの違いによる追加入力

の三点がある。①は前稿でも触れたようにシステムで対応できるとよいのであるが、難しいようであるし、③もやむを得ないのかもしれない。②には、端末の操作ミスも含めたケアレスミス、システムに不慣れなためのミス、入力規則類の解釈のバラつきによる（必ずしもオンライン目録特有のものとは限らない）ミスが考えられるが、データ修正の中でも書誌単位の作りかえが最も手間がかかり慎重さを要する。不運にもこのようなレコードに出会ったら、1) そのまま所蔵をつける、2) 面倒でも所蔵のついている機関に連絡して作り直す（まず作成機関に連絡したいのであるが、所蔵検索・簡略画面でトップにあるのが作成機関とは限らない、即ち作成機関を確実に知る方法がないのが一つ問題である）、3) 既に存在するレコードはそのままにして新たにレコードを作る、といった方法がとられ得る。より確実な書誌単位の決め方を徹底する必要があるが、どんな基準を決めてもある程度は様々な判断によるレコードができ、それに対して上記三つの方法のどれもがとられる可能性があるの、その際の対応の仕方も決めておく必要があろう。

ケアレスミスについては、実験期間中に入力データについて、二、三の機関から問い合わせの電話や手紙をいただいた。実は入力データのチェック方法を確立しないまま実験を行なったので、ご指摘いただいた以外に偶然みつかったミスだけでも相当あったのはショックであった。発見の動機は、コマンド投入後のレスポンスが遅いため次画面へ移るまでに気がついたもの、後日重複図書の所蔵をつける時に気がついたもの、集計のための画面コピーや自館の他の入力担当者からの指摘によるものなどである。最後に自戒の意味で筆者のケアレスミスの事例を記して終りとす。

1. コードブロックのデータの入れ忘れ。
2. 参照ファイルを流用した際、VOLデータを持つ書誌レコードのPUB、PHYSデータの修正のし忘れ、及びヨミの付与・修正のし忘れ。
3. 類似の書誌レコードから流用入力した際のデータのつけかえ忘れ。
4. 著者名典拠のリンクのつけ忘れ（流用入力画面のALにデータがないとき）。
5. 書誌単位の間違い（その日の気分で判断が異なるようである）。

注1) 「整理技術研究」23号掲載（予定）

注2) 実験中の事例は前稿のとおり。各フィールドごとの事例は、60年度及び61年度データベース研修の課題レポート「オンライン目録システム図書記述マニュアル」、「総合目録データベースコーディングマニュアル 図書編」または、タスクフォースによる「オンライン目録システムコーディングマニュアル 和図書編暫定版(案)」に詳しい。

## 既接続図書館だより

### 現状報告：慶應義塾大学三田情報センター

慶應義塾大学三田情報センター

閲覧課長 わた なべ みつ ひこ  
渡 部 満 彦

整理課 なか しま とし き  
長 島 敏 樹

学術情報センター（以下NCという）ニュースNo.1に既報されている通り、慶應義塾大学三田情報センター（以下、三田情セという）がNCと接続を完了して、目録所在情報サービスの利用を開始したのは昭和61年4月15日であった。私立大学では成蹊大学に続いて第二番手である。初期の計画では昭和60年4月に接続予定であったが、諸般の事情により翌会計年度まで延期された。

接続完了後9ヶ月が経過したわけだが、その間にさまざまな問題が生起している。この問題の背景には、学術情報ネットワークというものが、当然と言えば当然なのだが、巨大なアンサンブルで構成されているということがある。あたかも舞台芸術が大道具、小道具、照明、音響効果……等々のアンサンブルから成立しているのと対比できるように。

つまり、NC側を取ってみれば、それを制約するメインフレーム、提供されるデータベース、サービス内容とその運用方法その他、また接続参加館側に目を向ければ、そこにプロポーズされているメインフレーム、NCが提供するサービスを基礎に構築される図書館システム、参加館固有の業務形態、与件としての予算——こういったもののアンサンブルとして学術情報ネットワークが整備されて行く。

かかるアンサンブルの要素のうちで今後重要になると思われるものはNCの運用形態とメインフレームが持っている技術水準、それにオンライン目録システムを利用する参加館の目録に関する考え方、共同・分担目録作業における品質向上への努力——この三つであろう。しかし、ここは以上のような問題点を掘り下げる場ではないから、三田情セの現状だけを述べることにする。

三田情セにはNC用端末としてFACOM 9450Σが整理課（写真参照）、情報サービスにそれぞれ各1台、計2台が配置されている。後者は相互貸借の窓口となるために、またNC以前にアジア経済研究所のLCマーク検索端末が置かれていたので、その代替である。LCマークは利用者がアクセスできたが、NC端末はいまのところ業務用のみである。相互貸借システムが未だリリースされていない



FACOM 9450Σによる入力風景

ので、現在は主に情報サービスの過程で発生する書誌確認に利用している。

一方、整理課では接続3ヶ月目の7月中旬、教育モードから業務モードに変更し、本格的にNC端末による処理を開始した。とはいえ、処理できる冊数には限界がある。昭和60年度の蔵書統計によれば、年間受入れ冊数は62,276（和書17,722，洋書44,554）冊、製本雑誌も含めると84,781冊となる。これらの図書を端末1台で処理しようとする 것과自体土台むりなのである。これまで三田情セでは、洋書の目録作業にはA. B. C.（アジア・ビジネス・コンサルタント）の印刷カードを利用し、和書の目録作業にはJAPAN MARC, TRC MARC から自館の目録カードを作成してきた。そこで、当面NC端末により処理する資料は、A. B. C.カードを利用できなかった洋書の中からランダムに選択したものに限定している。受入れ年や刊行年等で区切ることにはしていない。これらの中にはNC参照ファイルのUK MARCを利用できるものが若干含まれる。

NC端末で処理したものは、ローカル・コマンド（LSAVE）により、大学三田計算センターのFACOM M-360のディスクに記録される。記録されたコードは現在、三田情セが開発したプログラムによって目録カードを作成するだけで、他の業務には利用していない。つまり、従来タイプライターでオリジナル目録処理していた資料の一部が、タイプライターに替ってNC端末によって処理され、結果として目録カードが作成されるということである。そして、このことによって微力ながらNCのオンライン総合目録のファイル形成に寄与しているというのが現状である。昭和62年度には整理課にさらに2台（FACOM 9450Σ）が置れる予定であり、処理対象資料の範囲を拡大して行くつもりだが、上述した処理方法にしばらく変化はないであろう。

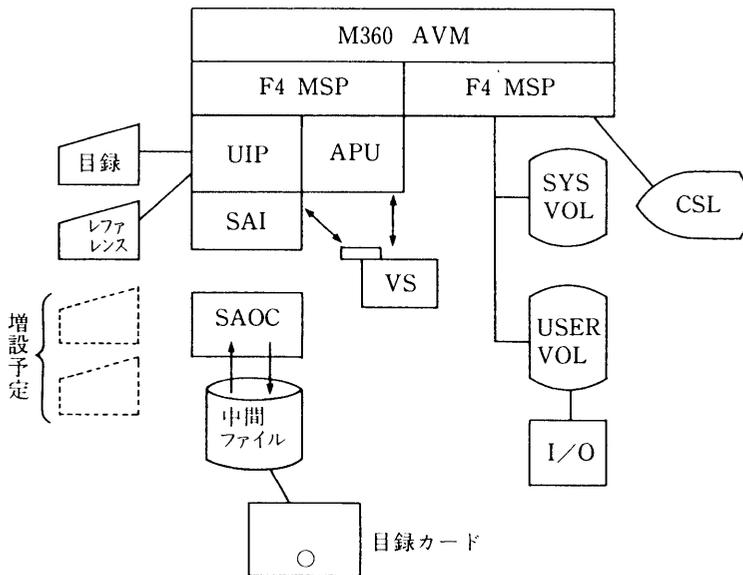
参加接続後9ヶ月、さまざまな問題があると書いたが、NC側の目録システムに関しては、システムのバグ、使い勝手の悪い点など、疑問点、要望が出ている。これらはその都度、電話あるいは「オンライン・システム質問書」によりNCに問い合せてきた。質問書だけをとって見ても、その枚数は25枚に達した。これらの質問のうち20件は回答が得られたが、4ヶ月以上たっても何の回答もない、いわゆるナシノツブテがある。また回答されたものでも、バグについては原因不明、こちらからの要望については対策予定といった主旨のものがあり、必ずしも満足できる、また納得のいくものではない。最近になって「オンライン・システムニュースレター」が発行されるようになったが、そこに明記されている改善策と機能追加がタイムリーに処理されているとは言い難い事態も起きている。今後迅速な対応を期待したい。

三田情セのコンピュータ・システムの概念図は図1の通りである。今後、専用機を導入するか、あるいはNCを中心にトータル・システムを構築するか、ILIS等のパッケージ・システムを導入するかといった懸案が残されている。

書誌ユティリティの先発であるアメリカのOCLCの場合でも、安定したシステムになるまではかなりの年月を要している。OCLCは目録システムのための専用端末を開発し、コンピュータもFEP、DB管理、ホストといずれも目録システムのためにOS等が最適化されている。一方、NCの場合には日立機を中心にN1拡張を介して富士通機、NEC機、IBM機が各社独自の端末を使用している。また、NCのOSも書誌情報データベースを管理するために最適化されているようには思われない。

このような状況の中でNCが健全に発展して行くためには、まだまだ日時を要するだろ

図1. コンピュータ・システム概念図



う。オンライン総合目録の理念が早期に達成され、共同・分担目録作業、相互貸借が日常業務化されるには参加館の努力もさることながら、NCの参加館に対する気配りは勿論のこと、特に未参加の私立大学に対しての積極的な姿勢を期待したいと思う。

## 茨城大学の図書館システム

茨城大学附属図書館図書情報係

さとう 尚武  
佐藤 尚武

本学が学術情報センターとの15番目の接続館になるまでの経緯からご紹介する。

### 1. 経 緯

- 昭和59年6月 評議会において、本学情報処理センターに関する60年度概算要求が決定される。『情報処理センターの設置目的は、研究、教育、図書館とする。図書館には図書館用パッケージを入れる』
- 60年3月 機種選定専門委員会において「茨城大学情報処理センターシステム仕様書」が決定される。『アプリケーション・ソフトについては、業務処理をできる限り貴社の提供されようとする標準図書館ソフトに適合させ、プログラム修正の手間を最小限に止める方針である』
- 6月 情報処理センターに設置される機種について、HITAC M-240Hシステム（主記憶：16MB、ディスク：10GB）が決定される。

- 7月 情報処理センターが設置される。  
 附属図書館に学術情報処理電算化準備室が置かれ、専任職員を含めた本格的な業務電算化推進体制がスタートする。
- 61年3月 M-240 H稼動開始
- 4月 学術情報センターと接続。(N1ネットワーク, DDXパケット交換網)

## 2. BIBLION

前述のように本学の図書館システムは、当初から資源及び手法の両面ともに大きな制約を受けて産声を上げざるを得なかった。

BIBLIONはファコム・ハイタック(株)が標準図書館ソフトとして本学にインストールするもので、図書館情報大学のLIAISONや東京大学のLILIPUTとは、いわば異母姉妹のような関係にある。

BIBLIONは貸出・返却システム、図書管理システム、雑誌管理システム、蔵書管理システム、情報検索システムの各サブシステムから成る図書館トータルシステムである。前の4つのサブシステムはリレーショナル型DBMSのRDB1によって構築され、情報検索システムはORIONと呼ばれるDB検索システムでつくられている。BIBLIONの構造及び機能については、これまで前記の先行大学の開発関係資料などに詳しく紹介されているので省略させていただきたい。

61年12月現在、業務運用しているのは貸出・返却システムのみである。図書管理システムと雑誌管理システムは運用テスト中、蔵書管理システムは62年当初にインストールの予定、情報検索システムについては導入スケジュールは未定である。また、蔵書管理システムのインストールと同時にRDB1のバージョンアップ(→03-00)を予定している。

## 3. 電算化への対応

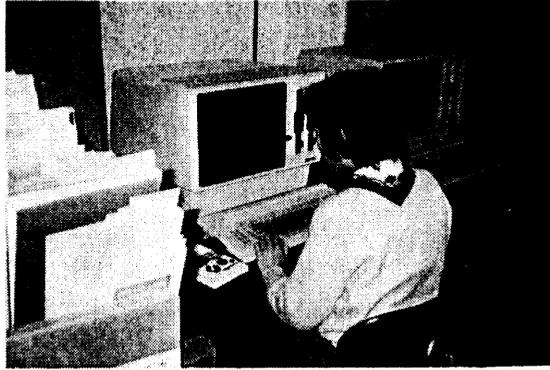
近年の大学図書館業務の電算化は、学術情報システム構想と一体になっており、学術情報システムとのリンクを前提としたものでなければパーフェクトなものとはいえない状況にある。本学が頼みとする標準図書館システムにおいても、図書館ハウスキューピングの電算化と学術情報システムネットワークへの参画が効果的に融合してトータル運用を実現することが目標となっている。しかしながら、そもそも標準的な図書館の運用とはどういうものであるか、あるいは標準化の意義などについて十分に検討がされない段階で、レディメード商法のご厄介になることになってしまったといわざるを得ない。

本学のように非常に限られた予算やスタッフによって、急速に電算化を進めざるを得ない図書館にとって、“電話一本で電算化ができる”とはいかないまでも、標準図書館システムに寄せる期待は大きい。しかし、BIBLIONは標準システムというにはまだまだ未成熟のものである。メーカーに努力を求めるためにも、ユーザー間の連携を推し進めていきたいものである。

BIBLIONを既製の洋服に例えるとしたら、ズボンの裾の手直しや肥満気味のボディのシェイプアップのようなことを行わなければならない。本学においても三館(本館:水戸市, 工学部分館:日立市, 農学部分館:稲敷郡阿見町)の利用規則はもとより本館の物品

管理組織や事務組織などについて、これまでに見られないような大幅な改正を行った。また、今まで以上に三館間の連絡を密にし、サービスのレベルアップと均質化を心掛けている。さらに、学部等図書室とのコミュニケーションをはかるための事務連絡会も動き始めた。今後も図書館の役割や種々の問題を再点検し、BIBLIONに適合させる努力を続けていかねばならないだろう。

本学の電算化とは、図書館のポリシーと既存システムとの生臭い格闘に他ならない。



T 560 / 20 による目録業務

## 学術情報センター・セミナー昭和61年度前期報告

愛媛大学附属図書館医学部分館整理係長

くわのけんじ  
河野建二

### 「捨て育ち」

「君達に対して、当センターは何もしない。ここの施設を大いに使って自由に勉強してほしい。疑問があったらどんどん質問すること。これを“捨て育ち”という。」第1回学術情報センター・セミナー開講式での井上先生の御挨拶である。手取り足取りとまではいかにしても、多少持っていた甘えが初日に消し飛んでしまった。

セミナー生6人。仙台から鹿児島まで全国から集まった。男ばかりである。年齢は一番上が40才、下が25才。それぞれ目的を持っているが、一言でいうと学術情報システムの勉強に来たのである。

セミナーは大きく四つに分かれる。講義、見学、演習、そしてレポート作成である。時間数を調べてみた。講義123時間、見学45時間、演習183時間、レポート作成69時間、その他報告作成等45時間、合計465時間となった。週にすると15週間である。

講義は東大、慶應大、図書館情報大、学術情報センター等20人の先生方により、それぞれ半日を一つの単位として、概ね2回行われた。

見学は10ヶ所。大学図書館、企業等、最先端のところばかり。どこでも心のこもった説

明と案内を受け恐縮した。

次に演習である。センター側から与えられた二つの課題を仕上げなければならない。その一つは「目録システムの作業性能の評価」、言い替えると、目録システムによって1冊登録するのに何分かかかるか、様々な条件を考慮して時間を集計し、評価するというのである。二つ目は「著者名典拠データ（和団体名）の一括作成のための作業設計とマニュアル作成」である。6人全員で取り組んだり、3人ずつ2班に分かれたりして検討した。

最後にレポート作成である。テーマを何にするかで悩んだ。休日になると書店を歩き回り、疲れるとパチンコ屋に座り込んだ。そして余計に疲れた。思い悩んだ末に「外国雑誌の選択と評価：愛媛大学医学部分館の場合」に決めた。資料集め、統計表作り、ワープロとの戦い等四苦八苦してまとめた。

地下鉄のラッシュ。何年ぶりの教室でのカンヅメ。よく分からない課題との取り組み等、15週間よくもったなあが実感である。

御指導頂いた先生方、センターの皆様、見学・資料の利用でお世話になった外部の方々この研修の機会を与えて下さった上司の方々、館員の皆様、御礼申し上げます。長期間苦楽を共にした仲間の皆さん、有難うございました。また、どこかで一緒に飲みましょう。終わってみると良かった「捨て育ち」！

#### （各セミナー生のレポートのタイトル）

- 1) 井上正則（同志社大学図書館）：学術情報センターオンライン目録システムにおける効率的な検索のすすめ — 和図書を中心にした —
- 2) 牛島 裕（近畿大学中央図書館）：目録システムにおける参照ファイルと書誌階層
- 3) 二村英文（名古屋商科大学中央情報センター）：大学における電算化と図書館 — 名古屋商科大学中央情報センター —
- 4) 松井好次（東北大学附属図書館）：スウェーデンにおける書誌ユーティリティ — LIBRIS を中心に —
- 5) 吉田英明（鹿児島大学附属図書館）：大学図書館の変容とその環境 — 学術情報センターとの関連において —
- 6) 河野建二（愛媛大学附属図書館）：外国雑誌の選択と評価 — 愛媛大学医学部分館の場合 —

## 第2回総合目録データベース実務研修を終えて

弘前大学附属図書館  
医療技術短期大学部分室

さいとう むのる  
齋藤 穂

今回の研修には、接続館から7名、接続予定館から6名の総勢13名の参加となっており男性8名、女性5名で年齢層は20代から40代までの構成となっていた。

8週間のカリキュラムは、まさに総合目録データベース研修のタイトルそのもので、全日程をおおむね2分する目録実習5週間、演習3週間となっており、午前・午後の各コマを単位とした日程表はあっけにとられるほどシンプルに組み込まれたものであった。これは、研修方法として個人的、集団的な自主性を尊重することを目的とし、自主研修の方針をもちこんだステップ研修の故である。段階ごとの教職員の講義、ステップ課題の修得と個別課題の探究による疑問点・問題点は研修員グループで開題する。グループ開題が困難な場合は教職員からの指導を受けるといったシステムである。研修項目を要約すると次のようになる。

### 1) 講義について

センター教職員を主体とし、学術情報センターをめぐる概括的、個別的な動向及びセンターシステムの最新の知識を受けた。

### 2) 見学について

東京大学、東京工業大学、埼玉大学を見学した。いずれも当代の先進的、代表的な図書館であり、これからの図書館システムを考えるうえで非常に参考になった。

### 3) 目録実習について

#### 1. 目録システムと操作

#### 2. MARCの変換仕様の把握

JP MARC, TRC MARC, LC MARC, UK MARC, LC Name Authority の各MARCレコードから、総合目録データベースの参照MARCにフォーマット変換する際のフィールドの対照表を作成した。

#### 3. 教育モードによる流用入力、オリジナル入力を実習した。

#### 4. 業務モードで実際の入力を行い、入力データのチェックを行った。

MARC変換仕様の把握によって、各MARCレコードの特性や総合目録データベースの内容についての理解を深めることができた。

### 4) 演習（コーディングマニュアル作成）について

演習共同課題であるとともに、実務上での必要性について強く痛感しているだけに積極的に取り組んだ。しかし、MARC変換仕様の把握等一連の実習を通じての疑問点、問題点が多く、次の点にテーマを絞り、より詳細に検討した。

1. 書誌構造
2. VOL関連フィールド
3. 複製版の取扱い
4. CWの運用
5. ALの運用
6. 典拠ファイルの運用

3週間の短時日での不十分な検討結果と、センターとして検討段階にある点については

研修員暫定案をもとに、全項目について分担執筆し、研修を通じてセンターから吸収し、意見交換をした結果の習作として提出することができた。

研修を終えて

端末操作と入力基準の検討にほとんどの時間を費し、その過程において目録データベースを知り、センターを知り、自館システムの考察をし、研修目標を達成することができた。また、センターの職員、タスクフォース、セミナー研修員、見学館の職員の方々等、多くの人との情報交換も大きな研修成果となった。

最後に、この雑感文は、データベース研修員日誌から要約して記した。

#### (第2回総合目録データベース実務研修員)

小幡砂智子 (新潟大学附属図書館)	恩知 陽子 (山口大学附属図書館)
菊地 房雄 (東北大学附属図書館)	金城 照子 (琉球大学附属図書館)
熊谷 伸彦 (東京工業大学附属図書館)	河野 富行 (大阪大学人間科学部)
堤 美智子 (京都大学附属図書館)	友光 健二 (東京学芸大学附属図書館)
中野由紀夫 (九州大学附属図書館)	平尾 行藏 (慶應義塾大学三田情報センター)
藤巻美恵子 (東京大学生産技術研究所)	藤原 誠 (名古屋大学附属図書館)
齋藤 穂 (弘前大学附属図書館)	

## タスクフォース奮闘記

### NCHAR (314)

かい だ たつ お  
貝 田 辰 雄 (北海道大学大型計算機センター)

学術情報センターの事業の1つである「学術情報ネットワーク」の構築作業を主要業務として、私と、「〇〇おました」、「〇〇いっちゃ」、「〇〇ばってん」、「〇〇するっしょ」等々のローカル・ランゲージと各種のプログラム・ランゲージを得意とする他の6人とともに5月1日に着任した。しかしながら、両方のランゲージは、数ヶ月続いた文書作成業務とは関連がなく大変苦勞したが、私たちの潤滑油として貴重な役割を果してくれた。任期もあと数ヶ月残すのみとなったが、「タスクフォース」という身分からか、センターのサービスやシステムの運用等において、もどかしさを痛感しつつ、学術情報センターの発足初年度に参加することができ、大変光榮に感じている。したっけネ!

### 自問自答

すず き しん いち  
鈴 木 新 一 (東北大学大型計算機センター)

システムの更新、学術情報ネットワークの構築等々と62年4月の本運用に向けて慌ただしい日々を送っているなか、「タスクフォース奮闘記」の原稿依頼を機会に赴任してから現在までを回想してみた。

ある種の期待と一抹の不安を胸に“花の東京”に上京して、はや7ヶ月、片道約40分の徒歩通勤、このブラブラ歩きの時間が私はとても好きである。

東京? …………… “高所に立つ”場?!

単身赴任? …………… 1人ぼっちのフリータイム?!

宿舍? …………… 三畳一間の禅道場?!

タスクフォース? …………… 一宿一飯の渡世人?!

学術情報センター? …………… ???

このように、他愛ない事を考えながら学術情報ネットワーク構築作業を進めている訳であるが、常々思う事は、このネットワーク構築はとても大切であるが、この構築作業及び運用に携わる人達の“人間ネットワーク”の構築がそれ以上に大切ではないかという事である。

私は、“人間ネットワーク”を基盤として、この上に学術情報ネットワークを構築し運用してゆきたいと思う。

残り4ヶ月、タスクフォースの人達が仙台弁に汚染されて帰るのではないか心配である。でも、改まって話すとべろ(舌)を噛みそうなので勘弁してほしい。

そんでね、“人間ネットワーク”に乾杯すっちゃね!!

### ブラックボックス

はやのひろし  
早野裕士 (東京大学大型計算機センター)

東京大学職員Aとの会話

私:「5月から学術情報センターの併任になったんだ。」

A:「何処にあるだ。」

私:「茗荷谷にあるんだ。前の、東京大学文献情報センターだよ。」

A:「知らないなあ。そこは、何をやっているんだ。」

私:「図書館と何かやっているらしいよ。」

最初はセンター要覧。その中で、「オンライン目録システム」「ILL」「NC」「LC」「JP」「典拠」「学総目」……要覧を理解(言葉の意味)するのも大変だった。それから7ヶ月……未だに、『何か』の内容までは解らない。そして、あと4ヶ月果たしてブラックボックス・学術情報センターから出てきたとき、どの位まで理解できているだろうか?!

### 楽術乗方寝っと話〜苦

つつみ　もりまさ  
堤　守　政 (名古屋大学大型計算機センター)

着任して二ヶ月位だったと思う。

学術情報ネットワークの応用について考える機会があった。私の悩裏に浮かぶのは、「チケットや宿舍情報のキャプテン」、「株式投資エキスパート」、「とらば一ゆ情報」、「オンライン宝くじ」……などなど、不謹慎?なアイデアばかりである。

ネットワークも使いようで、上に何を乗せるのかで儲かったり、研究に役立ったりする。そんな訳で、将来、あちこちのセンターで独自の知識ベースや、新しい学術オンラインサ

ービスを競い合うことになると、ネットワークがおもしろくなる。

### 一人ぼっち

藤岡節夫（京都大学大型計算機センター）

センターにいと淋しさも忘れ、タスクの部屋には笑い声も聞こえるが、宿舎に帰ると、電氣も灯っておらず、わびしい気持ちになってくる。日曜日や祝日になると特にそんな気持ちになり、すぐ、家に電話してしまう。子供の声を聞くと「明日もまた、一日元氣を出してがんばろう」という気持ちになってくる。子供には悪いがもうしばらくの辛抱だ。4月になると、ゆっくり子供と遊んでやれるだろう。

### 待ち遠しい日

坂賀力（大阪大学大型計算機センター）

“ほおー”っと一息ついて、ウーロン茶などを飲みながらワープロと、にらめっこ。  
「来年3月末まで後4ヶ月だぁー」なんていうと、いやぁーな噂が聞こえてくる。  
大阪大学に就職して、まだ1ヶ月に満たない頃、東京行きの話しがあり、独身という身軽さと1年という期限付きの為、気軽にOKしてしまい、歓迎会と送別会が同じ月に有るという異例の笑い話になってたころには、仕事量、宿舎、待遇の凄さなどは全然想像もしていなかった、あの日に早くかえりたい。「どわいっきらいだぁ、3月32日なんてえ!!」

### 辞書

河津秀利（九州大学大型計算機センター）

「〇〇さん、辞書貸して」……

センターにタスクフォースとしてやって来て、ようやく7ヶ月が過ぎた。この間、キーボードを叩いて過した時間と、鉛筆を持って過した時間とどちらが多いだろう。大計センターでは文章を「書く」ではなく「打つ」であった。ほとんどをワープロを使って作成する。こちらでは文章を書くことが多いのに、ワープロが少ないからたいへんである。文章を書くにも、肝心の「漢字」が思い出せない。これにはどうやら、皆さんも困っているようだ。

「〇〇さん、辞書とって」「はい、どうぞ」

## 接続ニュース

去る10月1日、新たに私立の大阪工業大学中央図書館が本センターとの接続を完了し、目録所在情報サービスの利用を開始いたしました。これで本センターとの接続機関は、国立14、私立4の計18となりました。

なお、18接続機関のうち、業務モードでの利用を行っている機関は下表のとおり、13です（業務モード欄○印）。

No.	大 学 名	機 種	接 続 日	業務モード
1	東 京 工 業 大 学	HITAC M-240 D	昭和 59. 11. 20	○
2	大 阪 大 学	ACOS S-450	60. 1. 16	
3	名 古 屋 大 学	FACOM M-340	60. 2. 1	○
4	京 都 大 学	FACOM M-340	60. 6. 1	○
5	埼 玉 大 学	HITAC M-260 D	61. 1. 8	○
6	琉 球 大 学	FACOM M-180 II-AD	61. 1. 13	
7	北 海 道 大 学	ACOS 610-10	61. 2. 8	○
8	京都工芸繊維大学	FACOM 9450-II	61. 2. 12	○
9	名古屋工業大学	FACOM 9450-II	61. 3. 1	○
10	東 京 大 学	HITAC M-260 D	61. 3. 4	○
11	東京学芸大学	HITAC L-470	61. 3. 25	
12	富 山 大 学	FACOM M-360 AP	61. 3. 28	○
13	成 蹊 大 学	FACOM M-360	61. 4. 3	○
14	慶 應 義 塾 大 学	FACOM M-360	61. 4. 15	○
15	茨 城 大 学	HITAC M-240 H	61. 4. 22	
16	南 山 大 学	IBM 5550	61. 5. 19	○
17	群 馬 大 学	HITAC M-240 H	61. 9. 10	○
18	大 阪 工 業 大 学	IBM 5540	61. 10. 1	

(昭和61年11月末現在)

## 委 員 会

### 総合目録委員会

昭和61年度第1回総合目録委員会（委員長：井上如学術情報センター教授）が昭和61年11月27日に開催された。開会に際し、井上委員長より、当委員会は昨年度の目録情報専門委員会及び図書館ネットワーク委員会の成果を引継ぎ、今年度新たに設置されたものであり、本委員会の作業は、①目録所在情報サービスの運用、②目録情報の入力基準、③学術雑誌総合目録の編集などに関することを検討・審議することであると説明があった。

まず、センター側より昭和61年度の目録所在情報システム運用状況及び学術雑誌総合目録事業についての報告があった。

次に、昭和61年度の他の事業として、①学術情報ネットワーク、②情報検索サービス及びデータベース形成事業、③システム運用体制、④教育・研修事業などについてそれぞれ報告があった後、センター側より、(1)昨年度作成された入力基準の運用、(2)逐次刊行物の入力基準、(3)総合目録小委員会の設置についての提案があり、これらについて審議した。

(1)は、センター側からこの関連資料として提出された「『目録情報の基準』追加検討事項」について検討した。その結果、この追加検討事項は本委員会の下に設ける小委員会に付託し、検討していくことが了承された。ただし、検討にあたっては、①これまでの接続館の実使用経験を十分に踏まえること、②検討事項の中には目録規則の問題、システム運用上の問題、入力基準上の問題があるので、問題を分けて検討すること、③日々の作業上発生する問題に即応できる体制を考慮に入れることなどが確認された。

(2)は、逐次刊行物の入力基準は暫定措置となっているが、学術雑誌総合目録欧文編の完成までは大きな変更は望ましくないことが了承された。

(3)は、本委員会の付託事項について詳細な検討を行うため、13名の委員からなる総合目録小委員会（主査：宮澤彰学術情報センター助教授）を設置することとした。

当日、本委員会に引き続き総合目録小委員会を開催し、付託された事項について検討を行った。検討の結果、①「目録情報の基準」の追加検討事項への回答案作成、②問題解決のための調整手順案、③基準の改訂を含む総体的な検討案のそれぞれについて各委員でその検討を分担し、次回までに資料作成することとした。

なお、小委員会の次回開催日を昭和61年12月23日（火）とした。

## データベース委員会

データベース委員会（委員長：根岸正光学術情報センター教授）は、昭和61年11月29日に昭和61年度第1回の委員会を開催した。本委員会の任務は、学術情報センターの主要な事業のひとつである情報検索サービスとデータベース形成に関し、検討・審議することである。

始めに、目録所在情報サービス事業、学術情報ネットワーク、システム運用体制の整備、教育・研修事業の各事業について、それぞれの進捗状況の報告があった。

続いて、情報検索サービス、及びデータベースの作成について、東京大学文献情報センターの時期から準備を進めてきた現状について報告を行い、昭和62年度から実施する予定の情報検索サービスの計画、及び科学研究費補助金研究成果データベース等の作成計画が了承された。

次に、「学術情報センターの情報検索サービスの利用に関する規則」、及び、「学術情報センターの情報検索サービスの利用に関する実施細則」の審議を行った。検討の結果、「規則」については、さらに表現上の修正を加えた上で定めることが了承された。「実施細則」については、今回の検討結果をふまえて、次回に再度検討することとした。

最後に、学術情報データベースサービスのあり方について、意見交換を行った。



## 学術情報センター日誌

昭和61年9月1日～11月30日

9. 2 昭和61年度第2回総合目録データベース  
実務研修開講式  
〔研修員：小幡砂智子（新潟大学），恩  
知陽子（山口大学），菊地房雄（東北大  
学），金城照子（琉球大学），熊谷伸彦  
（東京工業大学），河野富行（大阪大学），  
齋藤穂（弘前大学），堤美智子（京大  
学），友光健二（東京学芸大学），中野  
由紀夫（九州大学），平尾行藏（慶應義  
塾大学），藤巻美恵子（東京大学），藤  
原誠（名古屋大学）〕
9. 3～5 第3回目録システム講習会
9. 9 I L Lシステム協力者会議
9. 30 安達淳助教授 文部省短期在外研究員帰  
国（USA）
10. 1 タスク・フォース着任  
〔小西和信（北海道大学），酒井清彦（横  
浜国立大学），谷岡修司（岡山大学），辻  
井喜美代（神戸大学），平田明夫（東京  
医科歯科大学）〕  
『学術情報センター紀要』編集委員会  
I L Lシステム協力者会議
10. 9 文部省科学研究費補助金・海外学術調査  
（フランス，西ドイツ）  
浅野正一郎助教授出発
10. 13 昭和61年度前期セミナー（5月19日～10  
月13日）閉講式  
〔研修員：井上正則（同志社大学），牛  
島裕（近畿大学），河野建二（愛媛大学），  
二村英文（名古屋商科大学），松井好次  
（東北大学），吉田英明（鹿児島大学）〕
10. 19 文部省科学研究費補助金・海外学術調査  
／浅野正一郎助教授帰国
10. 24 文部省科学研究費補助金・海外学術調査  
（カナダ，アメリカ合衆国）  
根岸正光教授，大山敬三助手出発
10. 27 昭和61年度第2回総合目録データベース  
実務研修（9月2日～10月27日）閉講式
11. 1 タスク・フォース着任  
〔熊谷伸彦（東京工業大学）〕  
文部省科学研究費補助金・海外学術調査  
（オランダ，オーストリア，フランス）  
井上如教授，橋爪宏達助教授出発
11. 8 文部省科学研究費補助金・海外学術調査  
／根岸正光教授，大山敬三助手帰国
11. 10 昭和61年度後期セミナー（11月10日～3  
月19日）開講式  
〔研修員：奥田正義（大阪大学），栗田  
やよい（京都大学），鳥場世浩（立正大  
学），南里竜生（関東学院大学），村山  
英治（東洋大学），渡邊俊彦（大分大学）〕
11. 14～16 第4回目録システム講習会
11. 17 文部省科学研究費補助金・海外学術調査  
／井上如教授，橋爪宏達助教授帰国
11. 22 電気関係プレプリント情報データベース  
懇談会
11. 27 総合目録委員会
11. 29 データベース委員会

---

 <目次>

## 電子計算機システムの更新に

あたって……………(根岸 正光)…(1)

新システムの構成……………(橋爪 宏達)…(2)

## 学術情報データベースに関する調査を

実施……………(企画係)…(5)

## 情報検索サービスの開始に向けて

……………(データベース形成係)…(6)

米国の図書館の印象……………(安達 淳)…(8)

## 第2回学術情報センター・シンポジウム

(予告)……………(14)

## 北海道大学(NEC)図書館仕様端末と

ケース2開発……………(宇野 弘純)…(15)

接続のあとさき……………(原田 悟)…(17)

## IFLA東京大会国際図書館情報総合展に

目録システムを展示……………(19)

## 学術情報センター目録システムを

利用して……………(中井えり子)…(20)

## 既接続図書館だより

慶應義塾大学…(渡部満彦, 長島敏樹)…(23)

茨城大学……………(佐藤 尚武)…(25)

## 学術情報センター・セミナー

昭和61年度前期報告……………(河野 建二)…(27)

## 第2回総合目録データベース

実務研修を終えて……………(齋藤 穂)…(29)

タスクフォース奮闘記……………(30)

接続ニュース……………(33)

## 委員会

総合目録委員会……………(34)

データベース委員会……………(35)

## 昭和62年度学術情報センター・セミナー

及び研修についてのお知らせ……………(35)

学術情報センター委員会委員名簿……………(36)

学術情報センター日誌……………(37)